

『松浦宮物語』（学習院大学文学部日本語日本文学科蔵）翻刻（一）

増田高士 巖 子寒 小池ゆき  
田島文博 野澤志帆 山田真央  
川上佳風

「キーワード ①松浦宮物語 ②学習院本 ③翻刻 ④書誌 ⑤巻一」

はじめに

本翻刻は学習院大学文学部日本語日本文学科蔵『松浦宮物語』（913436/5001）を翻字したものである。当該写本はもともと分冊で全三巻だったものが一帖にまとめられており、今回は巻一の箇所を扱った。書誌情報と翻刻の凡例を以下に記す。

書誌情報

【請求番号】九一三・四三六／五〇〇一

【装訂】列帖装、一帖。

【書写年代】江戸前期写。

【寸法】縦二四・〇cm、横一八・〇cm、背（厚さ）二・二cm。

【外題】布目金紙題簽（縦一四・四cm、横二・八cm）に何も記さず、表紙中央に貼付。題簽を付した時期は書写時よりも後。

【表紙】緑地金欄唐花唐草宝尽（七宝・宝卷）。右中央部に汚れあり。

【見返】布目鳥の子地・金銀小切箔・金野毛・金銀砂子散。

【本文料紙】鳥の子紙。

【内題】なし。  
【紙数】全一一〇丁。うち遊紙二丁。

【字 高】 約二〇・〇cm。

【半葉行数】 一〇行。

【和 歌】 歌は一・五字下り。一首二行書きで二行目は下がらず、また末尾は地の文に続く。

【書 入】 読み仮名として平仮名の書人があり、同筆の墨書き。

【保存状態】 並。小さい虫損あり。

【一 箱】 桐箱入り。縦二六・八cm、横二〇・八cm、厚さ三・六cm。

【極 札】 なし。

【蔵書印】 前遊紙裏に四か所、本文最終丁に一か所あり。前遊紙裏中央上に「学習院図書部」(縦五・三cm、

横五・三cm)、朱。同下部に「134576」(縦〇・七cm、横二・六cm)、墨。同左下部の上に「龍丘」(縦

一・五cm、横一・五cm)、朱・陰刻・方。同左下部の下に「□舎／楼主」(縦一・五cm、横一・五cm)、

朱・方。本文最終丁(二〇八丁目裏)に「学習院図書」(縦二・五cm、横一・〇cm)、朱。

※書誌情報の調査は山田真央が担当した。

※本文と丁数の内訳は以下の通りである。卷一(二一三六丁)、卷二(三七七八一丁)、卷三(八二二一〇九丁)、奥書は二一〇丁表。

### 凡例

一、改行は／で示し、半丁ごとに【】で丁数および表(「オ」)裏(「ウ」)の別を示した。

一、傍記がある場合、文字の右隣に記した。

例 大將

一、ミセケチがある場合、その文字の上に二重取消線を付した。ミセケチのある文字に傍記がある場合は、その右隣に記した。

例 ミセケチ

一、補入記号がある場合、○を補入記号とし、その右隣に補入された文字を記した。

例 ミ〇チ

一、和歌は一字下げとして扱い、記号の□を記した。

一、他本との照谷の便を考え、内容に応じて小見出しを付した。小見出しは萩谷朴『松浦宮全注釈』(若草書房、一九九七年)に従った。

### 一 生ひ立ち

むかし藤原のみやの御時正三位大納言／にて中衛の大將かけ給へる橘の冬明／ときこゆるあすかのみこの御はらにた、ひとりもたまへるおとこきみかたち人に／すくれ心たましゐ世にたくひなくおひ／いて給を父君はさらにもきこえず時の人／いみしき世の光とめてたてまつる七／歳にてふみつくりさま／の道にくらき／事なし御かときこしめしてこれた、ものには

あらさるへしとけうせさせ給ふ【2才】御前にめして心みのた  
 いを給にたとる所／なくめてたきふみをつくりすへておひ出  
 るま、に管絃をならひても師にはさしす、／みふかき手ともを  
 ひけははて／は人にも／とはすおほくは心もてなむさとりけ  
 る十／さいにて御前にてかうふりせさせてうと／ねりになさせ  
 たまふ明暮この人をもてあ／そはせ給ふにいたらぬ事なくかし  
 こけれ／はつかさかかうふりもほとなく給はりて十六／といふと  
 式部少輔右少弁中衛少將を【2ウ】かけて従上の五位に成ぬ  
 父君身にあまる／官爵をみたたまふにつけてもひとつ子にし／あ  
 れはゆ、しうのみおほさるさしして給／たひにこの子のゆへに  
 のみめむほくをほと／こし給へはましてなのために覚されんや  
 はかたち身のさえたらへる事こそあらめ／よのつねのわかき人  
 のこと色めきあたたな／る事もなした、みやつかへをつとめかく  
 文／をしてあかし暮せはみかどをはしめた／てまつりてまめに  
 おとな／しきもの【3才】とおほしたるにわかき心のうち  
 ひとつな／むひとやりならすくろしかりけるかなひ／のみこ  
 ときこえて后はらにてかきりなく／きよらに物し給ふをなんい  
 はけなくより／いかでとおもふ心ふか、りける

二 宴のあと

いつれもいとわか／きうちによつきたるともなければはるけや  
 ／る方なくてすきつるを九月菊のえむはて／て夕に人／まか  
 てちるになをさりぬへ／きひまもやと宮にまいりてけしきをと  
 る／に宮も御せんのかれ野御らんすとてはし【3ウ】ちかうお

はしますほとなりけりむつま／しくまいりなれ給ふ君なればふ  
 とも入た／まはす御ひはをわさとならずかきならし／つ、おは  
 しますけはひしるきにいと、心さはき／してはしのまに居ぬれ  
 は二のまにゐ／たる女王のきみきくのえんはて待ぬや思／かけ  
 ぬほとをいかでといふた、かくなん／□おほみやの庭の白菊秋  
 をへてうつろふ／心人しらむかもえならぬ一枝をもたりければ  
 ／あたれるすの下にさしいる、をめさまし【4才】うみたまふ  
 かむなひのみこ／□秋をへてうつろひぬともあたる人の袖か／け  
 めやも宮のしらくほのかにのたまひ／まきはせる御けはひ  
 のいみしうなつかし／きにいと、えたちさらす笛を吹ささひ  
 てかうらんにより居たるさまかたちみこた／ちにててもえ心つよ  
 かるましうそあるやし／をにのなをしりうたんのさしぬきわれ  
 も／かうのしみふかき一かさねたちはきたるは／わさと成つら  
 ん日の上そひもえかはかりな【4ウ】すやとそみゆるかせあ  
 ら、かに吹て御前の／木すゑのこりなく散に木の○月さし出  
 てうちとひとつに、ほへるくろほうのたく／ひなきに人の御心  
 もえむなりみこも世つ／きたる御心こそならひ給はねとなへて  
 の人／に、すきよらなるさまにてはし／ま／いり給ふをおほ  
 方にもいとあはれとみ給／へはわさとならねと御いらへなとも  
 ほのかに／のたまひかはすに夜もや、ふけ行に御こと／の音を  
 いみしう思ひしみたる事にてせち【5才】にそ、のかし奉れと  
 いたうおほときてさ／したまはするにおよひて御手をとらへつ  
 ／□恋しなはこひもしぬへき月日へていかに／物おもふわか身  
 とかしるもりいてぬる涙もせ／きやらぬにいとおそろしうてひ

き入なんと／おほせとつとらへたれば人のみきゆるも／あい  
なうてえうこき給はず／□なからへてすすくす月日を誰かその恋  
し／ぬはかり思とはみんとてもいとわひしと／覚おぼしたれば人の  
おもはん事のくるしき【5ウ】にいける心ちもせねとさてもえ  
みたれすなか／き夜すからなけきあかしてかくなむ／□いたつ  
らにあかせるよはのななき夜の暁あかつき／露にぬれか行へきいかは  
かり思ひかへして／かその名はいはしとうちなくさまも心／ふ  
かけなるをさすかにあはれとみ給ふ／□暁のつゆのその名しも  
らさすはわれ忘わす／れめやよろつ世までに

### 三 皇女入内

弁は物おもひそひ／ぬる心ちして父ちちの殿どのにまいりてうちふし／  
たれと目もあはすいと、うおきて女わうの【6オ】君のもとに  
ふみかき給ふきのふなんゆく／らむわきもはしめて思ひ給へら  
れしかは／うれしき月日なれと猶かくはかりのみ／まさる心ち  
し侍れはちへなみしきても／すへなき世をなんおもひ給ひわひ  
ぬるいてや／おしはからせたまへ／□もえにもえて恋は人みて  
しりぬへき歎なげ／をさへにそへてたくかなと有をみせたてま／つ  
れはあはれとや覚すらんた、かくなむ／□みてしかはわれこそ  
けなめもえにもえて【6ウ】人のなけきはたきつくすかにい  
と、なかめの／みせられていみしうしめりたるけしき／しるき  
を大將殿はなとかいと物おもへるさ／まなるおのこはさはかり  
ならぬたに心をやり／て身を思ひけたぬ物なりつかさ位をはし  
／めみにあまるめむほくをほとこすめるをな／とかいたく思ひ

しめりて獨ひとりのみあるあやし／き有さまかな世にはふり物といふ  
めれと／かくのみ思ひすましたるをみればいとなん／あやうき  
猶かれま心にのたまはせおしへ給へ【7オ】なと母みこにきこ  
へ給へはた、うつくし／と覚してまろはなに事をかはおしへむ  
おへる／子とそいふなる今はましていみしうたのもし／うこそ  
有やとの給あはれとみ奉る物から／いかでと思心のみそひてい  
みしうなけかし／□あし引の山のやま鳥やますのみしけき／わ  
か恋ましてくるしも有しはかりたに／いかでおもふ事をはるけ  
てしかなと思わたる／にこのみこは内にまいり給ふへきに成ぬ  
母／后にもせちに聞えさせ給へはさらぬ事た【7ウ】にいなひ  
申給へきにあらねはゐたちて覚しい／そくをきくにいとみし  
う覚ゆ月あかき夜く／まなき空を獨ひとりなかくめてかくなん／□山  
はを出つる月のすむ空のむなしく／成ぬわかこふらくはかひな  
き事をのみ聞ゆ／れと後の宮さへおはしましてひまもなきよ  
しをのみきこゆれば／□あらたまのすこかたけかきひまもなく  
へ／たてそふらしかせももりこぬ

### 四 遣唐の宣旨

たえぬ思ひに／よろつの事覚えてあけ暮すにあけんとし【8  
オ】もろこし舟いたしたてらるへき遣唐使けんたうし／副使そふつかひになし給ふへ  
きせんし有大將も／みこもいみしき事におほせとすへてすく／  
れたるをえらはる、わさなればと、めむちか／らなし弁君一か  
たならすちの涙をなかせ／といつれも心になふわさにしあら  
ねはみこ／つるにまいり給ぬときめき給事いみしきを／みきく

にいと、あちきなさまりてかくなむ／□おほかたはうき目を  
みすてもろこしの雲／のはてにもいらまし物を朝夕のみやつか  
へにつ【8ウ】けてたへかたき心をも中／／ひと方に思た／  
ゆはかりこきはなれんもひとつにはうれし／けれとおやたちの  
けしきをはしめおは／せんさまをたにみかさらん事をいみしう  
お／もふに月日すきてその程にも成ぬ式部／大輔なる参議安倍  
のせきまると云を大使／にてつかはさるへければかつ／世  
のはかせ／道／の人あつまりさえを心みいと、しういと／  
みならはすにこの少將すへていたらぬ所なく／かしこければみ  
かともいみしき物に覚し【9オ】めて春正下のか、ゐたまふ  
いまはと出た／ちて京をいつるにたかきいやしきむまの／はな  
むけすすからふみつくりあかして／いてなんとするにいみし  
う忍ひて給へるかん／なひのみこ／□もろこしのちへの波まに  
たくへやる心も／ともにたちかへりみよ今はとまいり給し／後  
一ことはの御情もなかりつるを心うし／と思になをおりすくさ  
すの給へるをみるにち／の涙をなかせとつかひはまされうせに  
ければ【9ウ】た、と、まる人につけて女王の君のもとに／□  
いきのをに君か心したくひなはちへ／の波わけ身をもなくかに

## 五 松浦の宮

大將はなにはの／浦まておくらむとのたまひしかと母宮／かき  
りあらん神のちかひにこそ、はさらめ此／國のさかひをたにい  
かてかははなれんとの／給ひてこそより松浦の山に宮をつくり  
て／かへりたまはんまてはそなたの空をみんわ／かき老たると

なきうかへる身の舟路に／さへこきはなれ給はんになみ風  
の心もしらす【10オ】たれもむなしくあひみぬ身とならはやか  
て／そのうらにみをと、めてあまつひれふりけ／むためしとも  
成なんといてたち給へは大將／かきりあるみやつかひをゆるさ  
れ給はねとす／み給はんさまをたにみおかとそひたま／へれ  
はみちのほとことにかはれるし／もなしおいかせさへほと  
なくて三月廿日／のほとに大宰府につき給ぬ大將さへそひ／お  
はすれば帥の宰相いみしくけいめい／してあそひしふみつくる  
これに日ころ【10ウ】と、まりて四月十日あまりふねよそ／ひ  
したまふ行ゑもしらぬ海のおもてをみ／給にかねて思ひし事な  
れと宮は心よは／くなかしそへたまふ／□けふよりや月日のい  
るをしたふへきま／つらのみやにわか子待とて大將殿／□もろ  
こしをまつらの山もはるかにてひ／とり都に我やなかめむいか  
はかりかはかくて／もおはせまほしけれと宣旨をもければか／  
へり給成けり弁少將うちいて、【11オ】□なみちゆくいくへの  
雲の外にして松／浦の山を思ひおこせん

## 六 船出

世のつねならすいかめ／しき舟のさまざまた、おしいつるま、に  
は／かなき木の葉はかりそみえ行はて／は／雲も霞もひとつ  
にきえゆくまでみす／をひきあけてなかも給御けしきのかき／  
りなく悲しきを大將は我しもおとるへき／ならねといかてすく  
したまふへき年月／ならむとあはれにみすてかたけれとかは  
かりもためしなき事とみな／もの給は【11ウ】せしかは七日

有てかへり給ふ別も又あはれなり大將／□しらざりし別にそへるわかれかなこれも／や世々のちきりなるらん宮／□いかなりしよ、のわかれのむくひにて命に／まさる物おもふらんとてもおしあて給ふを／よろつになくさめていて給もめつらかにあはれなりこの君ゆへうれしくおもた、しき／時もそこらおほかりしかとも又たくひなくか／なしきめをみるにもさま／覚しつ、けら【12才】れていたくなき給大將ことしそ四十六に成給ふさかりにきよけにてうす色のかた／もむのさしぬきにもえきの御なをし／うすいろくれなゐなどわざとならぬにしも／いみしうめてたしみこは卅四に成給ふし／ろき御そともにうす色もえきなこと／なる色あひならねとかきりなくあてに／まめかしき御さまなり

## 七 明州着到

少將はさま／＼かへりみのみせられて心ほそくなしきにも／かのみこの御ふみをそあたりさらすも給へる【12ウ】□たくへける人の心やかよふらんおもかけさら／ぬ波のうへかな／□わたの原おきつしほあひにうかふあはを／ともなふ舟の行ゑしらすも宰相もわかき／めこをと、めて獨いてたれはまして老の涙そひて／□かすかなるみかさの山の月かけはわかふな／のりにおくりくらしも思ひしよりも雨／風のわつらひなくして七日といふにそちか／く成ぬとて浦のけしきはるかにみえいは／のさまなへてならすおもしろきその夜めい【13才】しうといふ所につきてことよしかの國のみ／かとにそうせさすまつ此國の

かみ出むかひて／ふみつくりあそひなどす人のかたらふこゑ／鳥のさへつ音もみし世に、すめつらしく／おもしろきに行ゑなかりつるなかめはすこ／しまきれぬれとさま／思ひいてらる事／おほくてこし方のうみをはるかななむれ／はあをき波かすかにへたて、雲のいくへとも／しらぬに有かき物悲しきなかにも少將／はさま／忘れぬおもかけそひてうち涙く【13ウ】むせけしきをしらぬ國人もあはれとみて／旅ねも露けかるましう思ひおきてつ、こ／まかに心しらへは宰相もかたみにふみつく／りかはしてけう有とおもへれはかくめつら／しき人のいてきそふを猶かしこき國とおも／へり

## 八 長安入京

ほとなくめし有て都にまいる程は／るかに遠き山川野原をすき行はきひし／き道さかしきやまをこえつ、ゆくに五月の／雨はれすいと、かさやとりもわつらはしけれ／と都にまいりぬれはこの比みかと三十よは【14才】かりにていみしきしりの御代なり未／央の前殿にいて給ひてこの人／＼をめさる／ゑふのかさともいつくしくちむを引て／まもりたてまつる中をわけて御前にまい／るほとまつ樂のこゑをと、のふすくれた／るかきりなれば口おしき事なりしつ／きにふみなとつくりておの／心み給ふに／この少將さえのほどを御らんするにけしう／はあらすかしこきはさる物にてかたちの／いとめてたきを御目と、めて御らんすと【14ウ】しはいくらにかなると、ひ給へは宰相十／七なるよしを申いまたいはけなかりけるほ／とをいかてか

はかりはた有けんとおはれ／からせ給

九 少将殊遇

いとわかきうちにかたちのすへて／世になきさまなれはあはれに覺されて遠くもつかはさず宮ちかきあたり時の大臣に／おほせられてさるへき心まうけともえもいは／すせさせ給ふあけたては宮のうちをめして／さま／の道を心みならはさせ給なに事にも／すへてもとの國人およひかたくのみあるにつ【15才】けて人はめさましう思かたもあれとみかと／こらむするやう有ていみしうめくみかへりみ／たまふこの人ひとりめしぬきていとけち／かくかたらはせ給ふを大臣さるへき人とも猶／わさとふみをたてまつりこと葉をつくし／ていさめ奉るわか君あめの下しるしめし、／よりいさめことにしたかひ政をおさめ給事／なかれにさほをくたすかことしいやしき／草かり山かつの事まですて給はす今／はるかなるさかひよりわたりまいれるたひ【15ウ】人のよはひいたらぬをちかつけもちる給ふこと御代のきすと成ぬへしといさめたてま／つるをまことにあやしきまでもちあ給は／す漢武の金日磾わか國の人にあらさりき人／をもちゐる事はた、そのかたち心にした／かふへしとの給ひていと、したしくのみなら／させ給をあやしきまで思ひあへれとけに／かたち身のさえたらひてみえぬさまなるを／あはれに御らんすれはいみしうときめか／させ給ふ道さのことふみ的心をもいとなつか【16才】しうのたまはせしらすにましてい

くおはする太子をつねに御前にて／うつくしみたまふ時かならずさふらはせてこ／とになれつかふまつるへき御けしきあるに／つけて人はいみしう心えぬ事におもへれとこの／人ゆへそかくいさ、かかたふきあやしまれ給／事もいてきけるさまことなる舞姫ともか／すしらす花のことかさりてえもいはぬしら／へをと、のへこの國のかほよき人をあつめて【16ウ】心と、まるへき事をせさせ給へともとの國に／てたにいみしうしつまれりし心なればさら／にみたれすかきりなくおさめたるをか／國の人は思ひしよりもまめ成けりと有／かたく御らんすいたはらせ給へと國のならひ／いともしほりにこと／しくていさ、かの／たかひめあらはかならずおもきあやまちと／なりぬへきをみるに心をそへてつ、しみたれ／はた、ひとりねをのみして秋にも成ぬ

一〇 山上彈琴

八／月十三日の月くまなくすみのほりて【17才】三十六宮まことのにのこるくまなくおもしろ／きに夜はことなるめしなくてまいる事／なしちむのつは物いつくしうこ、のへをま／もり出る人をもききしくとへはわざとわ／ける事もせずいとまある心ちして例の／獨なかめふしたるに心は三千里の外にあく／かれて住なれし方の恋しさもいと、ま／きる、かたなければた、人一二人をくし／て行なもなく道にまかせていつれはしり／しらぬ秋の花いろをつくしていつこを【17ウ】てもなき野原のかたつ方ははるかなる海に／てよせかへる波も月の光をひたせ

るをはるか／になかめやりてみちにまかせてむまをうちは／や  
め給へは夜中よなはかりにもなりぬらんとみゆ／る月かけに松風と  
をくひ、きてたかき山の／うへにかすかなるろうをつくりてき  
ん引人／居ゐたり心にいりたることにてろうのものとのほ／る石  
きさはしのしにも馬をと、めており／てのほれはまたいと、を  
し上はしろきすな／こにておろそかなるやたてりろうは南みなみによ  
【18才】りてはるかなる海をみおろしたりことに人／のけはひ  
もせずきんこの糸はかりいふよしな／くすみのほりてかきりも  
なくおもしろき／にいかてこの手ならはんの心ふかくてあまり  
人／はなれにけるけはひはおそろしけれとこ／のきさはしをの  
ほれは人やくるともおもへ／らす年八十はかりにてしろくさら  
ほひた／れとよしありけたかきおきなのいかしろ／のほうし  
をしいれてそはにす、り筆／はかりをきてちりもくもらぬ月か  
けに琴【18ウ】をひくなりけりきさはしのうへのこしに居／て  
とはかりきくに心はすみまさりて涙は／ほろ／くをこほれぬ人  
のかくてゐたるをみいる／るさまにもあらずこ糸はいとおもし  
ろくて／琴のこ糸にあはせてさうかしたるにる物／なくめてた  
しうちみおこせてあやしとも／覚えられす又いふこともなく心  
をすませる／さまなれはた、き、ゐたるにあか月に成に／けり

一一 陶翁予言

月の入なんとする時に琴ことをそはなる／ふくろにいでてさしおき  
つかうらんのものな【19才】るつえをとりてろうよりおりゆく  
にきむ／のこ糸えをき、てよすから聞あかしつるたひ／人の心

のうちをおもしろくつくりて獨こと／のやうにすんするを聞て  
きさはしのなか／ほとにと、まりてふみをつくりかへす今はつ  
／かさをもかへしたてまつり世にもつかへすし／てこのろうに  
月をみる身となれ、と日の本もと／の人めつらかなるかたちをみて  
よるこふ心／あるよしをそつくれる猶いかてこの琴のふ／かき  
心ならはんと思ひてなを、くりてまた【19ウ】ふみをつく  
りかはずにこの人おしふる程その／名をとひそのこ糸をきかさ  
りしききよりこ／よひこ、にして君にあはむといへる事をし  
れりき君は人の國にきんのこ糸をつたへ／ひろむへきちきりに  
よりにて父母をはなれ／てわか國にわたれりこよひわれにあふ事  
／ちきりなきにあらすわれこの國にとりて／きむをたつさはれ  
る事七十三年このこ糸／によりて身にあまる位を給はりはから  
さ／るに棠花たいかをほとこす時とき有きまたこのこ【20才】糸によりて  
よこさまなるうれいにあひ心に／あまるかなしひにのそめりき  
つゐに上柱國じやうちゆうこく／太子大傳たいだいだん河南尹かみなんをさつげらるとしおとろへ身  
／きはまりてたち居もやすからすやまひおかす／によりてつかさ  
をたてまつり身をやすめてこ／のろうに月をみるに四とせに成  
ぬ秋の月春／の花の時た、この琴のこ糸によりて心をの／への  
こりの身をやしなふしかあれともふかく／この琴の心をしれる  
事を今の世にとりて／は美陽公主びやうこうしゆと聞ゆる女みこにはおよひた  
て【20ウ】まつらす君はかのみこの手よりこの音を／つたふへ  
き人なりかのみこは八月九月の月／のころかならずしやう山と  
いふ所にこもりて／この音をと、のへ給かれはとしはしめ  
て廿我にをよはぬ事六十三年女の身なれ／と前まへの世に琴をなら



ひてしはしこの世に／やとり給へるゆへにをのつからさととり有て／その手を仙人につたへ給へりさらに都にかへりてかならずかの山を尋ね給へこの手をつたへんと覺さはゆめ／みたれたる心を、さめ【21オ】てまのあたりいさきよくしてこの手をなら／ひ給へこの事心より外にもらしたまふな／この國のならひはひろきに、てせはしゆるへる／にてかたしまことにふかき所をあらぬ國／の人におしふる事はおほやけことにいさめ／給へとわれ世をのかれて後としをへたるう／へに佛道をならひてすてに戒がをたもてり／そらことのつみをおそる、ゆへにこの事をき／こえつるなりそのこゑをならひしりて後この國／にてゆめ／人にきかせ給なかの手をつたへ【21ウ】給はんほと心より外にみたる、所ませ給ふな／われこの世に命をうけたる事八十年いくは／くの月日にあらぬうへに我國おほきにみた／るへきによりてあひみん事かたし今夜の／たいめむをちきりとして後の世にかならず／ふた、ひあひみる事あらんとす又この事を忘／れ給ふなといひてろうのうへにかへりてこの引／つることをとりてさつくこれをもちてかのし／やう山を尋ねたまへその音をつたへて後にわか／國にてそのこゑをたて給事なかれとかへす／【22オ】ちきりてあけ行ほとに別ぬれはす、ろに／物かなしくてかへる道すからなかめをのみそ／する

一一 高山夜曲

暮もはてぬにいそきいて、聞し方に／尋ねゆくいみしきむまをいと、うちはやめ／つ、夜中にも成ぬらんとみゆる程におなし

／ことたかき楼うのうへに琴のこゑきこゆはる／かに尋ねのほれは道いと遠しこれはか、み／のことひかりをならへいらかをつらねてつくれ／る物からやかす、くなくかりせめなるやに／人すむへしとみゆれとわざと木かけにか【22ウ】くれつ、ろうを尋ねのほれはいひしにかは／らすえもいはすめてたき玉の女た、ひとり／琴を引みたりみたる、心あるなどさはかり／いひしかとうちみるよりも覚えすそこら／みつる舞姫まの花のかほもた、つちのことく／になりぬふるさとにていみしと思ひしか／むなひのみこもみあはするにひなひみたれ／たまへりけりあまりこと／しくもみゆ／へきかんさしかみあげ給へるかほつきさらに／けとをからすあてになつかしうきよくら【23オ】うたけなる事た、秋の月のくまなき空／にすみのほりたる心ちそするにいみしき／心まとひを、さへてねむしかへしつ、かの琴／をきけはよろつの物の音ねひとつにあひて空／にひ、きかよへることけに有しにおほく／まさりたりとかくのたまふ事もなけれど／た、夢ちにまとふ心ちなからこのえし琴／をとりてかきたつるをみてもとのしらへをひ／きかへてはしめより人のならふへき手をと、／こほる所なくひとわたり引給ふをさく【23ウ】ま、にやかてたとらすこの音につけてかきあ／はずればわか心もすまみさるからにす、ろに／ふかき所そひてやかておなしこゑにねのいつ／れはてにまかせてもるともに引にたとる所／なくひきとりつこれも月のあけゆけは琴／をおしやりてかへらむとし給ふ時になし／き事物に、す覚えぬ涙こほれおちていひし／らぬ心ちするにみこもいたう物覚しみたれ／たるさま

にて月のかほをつくく／＼となかめ給／へるかたはらめる物な  
くみゆ例のふみつく【24才】りかはして別なんとする時この、  
こりの手は／九月十三夜よりいつよになむつくすへきとの給／  
□雲に吹風もおよはぬ波路よりとひこん／人はそらにしりにき  
との給へは／□雲のほかとをつさかひの國人もまたかは／かり  
の別やはせしと聞ゆるほともなく人々／むかへにまいるをとす  
れははしの方の山のか／けよりのたまふま、にかくろへ出ぬ

### 一三 面影去らぬ

あけは／てぬさきにといそきかへれとみの時はかり／にそうち  
やすみ給へと身には心もそはずな【24ウ】かめられてさらにい  
みしき心のみたれもいて○／ぬへきかなと心ひとつにのみそ思  
ひくたく／るこよひはひむなけにのたまひつれとかひ／なきな  
からおはすらんさまをもちかてみん／とおもへとみかと月のえ  
むし給ひてよ／すからあそひ明し給ふつきの日もいとま／ゆる  
されすまつはし暮させたまふ雨いみし／くふりて心ほそきたひ  
ねも今さらにおも／かけそへるはけにあちきなき身の思ひなり  
／□しらすりし思ひをたひの身にそへてい【25才】と、露けき  
よるの雨かなおなし月日も／所からは久しき心ちするに獨ねの  
秋の夜／はまして思ひのこす事なけれともかの御／かたみのね  
をたにえかきならさすありし／おしへをおもへはいと、のみ  
つ、しむさへなくさ／めかたければ／□忘れしとつたへしこと  
の音にたて、こひ／たにみはや秋のなかき夜からうしてあけ行  
／つ、みのこゑに勅使いそぎ、てけふも御あそひ／有へきよし

いへは日たかうみなまいりあつ【25ウ】まりぬ心はそらにのみ  
うきたちなからさ／ま／あそひ暮すに例のいとまゆるされす  
／よもあけぬかのみこはけふそ都へかへり給い／はけなくてこ  
の山に物忌し給ける秋の月／の夜仙人くたりてこの琴をしへけ  
るによ／りて八月九月の月のさかりにはかならず／かの山にこ  
もりてこの音をならしたまふ今／のみかとのひとつ后はらにて  
世になくもて／かしつき給ふみこなればあめの下なひきし／た  
かひ聞えぬ人なしこ、のへにいつかれ入給【26才】をはるかに  
さくにいふかひなく物かなしくて／た、の給ひしほとを待た  
るにはかなく過／て九月十三夜にも成ぬ

### 一四 九月十三夜

みかときのふよりな／やましくしたまひてめしなれば暮もは  
／てす例のまとひ出ぬ楼のけしきかはれる事／なしのこる手と  
もひきつくし給ひて例の／あけ方になりぬ月も入んとするに  
かへりお／りねどのたまふすへてうこかるへき心ちもせ／す御  
さまかたちはさらにもいはすはかなき／一こと葉御そのにほひ  
まてまことにたくひ【26ウ】なき御けはひをちかくてみだてま  
つるはう／つし心うせはてぬれとこよひなんこの音／を引あは  
せて心みるへきとのたまふをたの／みにてなく／かへり出な  
んとす／□手なれぬる玉のをことのちきりゆへあは／れとおも  
ひ悲しともみるとても例のいそかし／給へはかくろへ出ぬる名  
こり有しよりけ／に物かなしければこのわたりちかく山の／か  
けにやとりて日を暮す／□おほ空の月にたのめしくれ待と山の

雫【27才】に袖はぬれつ、暮にはちきりたかへすこの／手をな  
らひあかしてわかる、空ことに心をつ／くしてもあまた夜を過  
ぬれとなをかき／りのたひの思ひはせきやらんかたなきにこと  
／の音もつたへはてぬれぬれはうちはへ涙にく／れたるけしきを  
かきりなくあはれとみ／給ふ暁ちかき月のかけをつ／くとな  
かめ給／ま、に涙のこほるれば／□たまのをのたゆるほとなき  
世中を猶み／たるへき身のちきりかな【27ウ】□玉きはる命を  
けふにかきるとも身をお／しまし君をしそ思御手をとらへて  
む／せかへりなくけしきをみこいとあはれと／み給へこの  
楼はむかしひしりのたておき／し時よりいさきよき地としてさ  
らにみた／る、事なし日月そらにしり地神しもに／まもりたま  
ふ所なり山のさますくれて／ふかき琴にかなへるによりてこの  
所をし／めてこのしらへをならふ事七年に成ぬ仙／人時／くか  
よひてことをつくろひ楼をかき【28才】る我も此世になか、る  
ましければ一生の／後かならずこ、にかよひてきむの音をさか  
／むとすか、るちかひある所になかくうき／あとをと、めある  
ましき心をみえなは天地／の待みん事はつかしければいきても  
しに／ても身にはかふましこのことの音をつたへか／くまてな  
れぬるもちきりのなきにはあらず／心の外にうかりけるひとつ  
ゆへに世のそし／りをおふへき身となりにければかく尋ね／お  
はせしなりされとこの世に命をうけた【28ウ】る事いくはくなく  
らぬうちこの方にみた／れあらはかならず身をほろほすへき  
我身／なれとしゐて命にかへて覺すにしあら／は十月三日月の  
入なんとせん時禁中の／五鳳楼のもとを尋ねおはせかならずそ

こに／いてんどの給ひてこよひはつねよりもこ／とにいそかし  
おろしたまへは聞へんかた／なくてなく／かへり行に道すか  
らおもか／けそひてかなしき事ありしよりけなり／□みねはう  
しちきるその日ははるかなりな【29才】に、命をかけてすくさ  
む

一五 遺孤を託す

みかとはしはし／の事にやとくすりなし給ひしかといと／お  
もうおはしてなやみ給へはあるかきり思／ひなげくにおこたる  
さまもおはせて日比／へぬことなるめしなくてはまいらねと又  
／この人をあかすあはれに覺してよろし／くおはするひま／く  
にはめしいてつ、か／たしけなくのたまひかたらふ罪あらぬ  
國の人としてあひみる日かすすくなけれ／と汝はかならずひと  
たひは國をたいらく【29ウ】へきさう有我このやまひつゐにお  
こたらず／は世みたれなんとすなんちかならず太子／にしたか  
ひておそれのかる、心なかれ命あ／やふみなくしてかならずも  
との國にかへる／へし思ふゆへ有てこの事をもらしつゝ／まみ  
きく事をもとの國にしてあなたにか／たりもらすことなかれ人の  
くに、かへりさる／とも前の世のちきり有てつゐに我身には  
なれぬゆへあるへしかならずこのよしを忘れ／す我こと葉をそ  
むくへからすとのたまふ【30才】みしうかなしうてもとの國  
にてさらに弓／やのむかふ方をしらすいふかひなかりしは／し  
を申に人／まいれはの給さしつゝも／とつかうまつる人よりも  
こまかにの給つるを／あはれにかなしくおもふ

一六 五鳳樓の契り

十月三日にも成ぬ／たのめ給ひもしまことならむ時とおもふ  
／よりいと、心さはきてかの樓のもとに待居／たり宮のうちつ  
ねよりもつは物いつくし／くわつらはしきけしきなれとわりな  
く／まきれ入たるにけに月のいるほといたう【30ウ】もまたれ  
す出おはしたるさまかたち／中／／かの月かけよりけにめてた  
きをみる／に涙はさきにたちて廻廊のいしたんに／た、時のほ  
とありきとひらを引たてたれ／はいとくらきにうち匂ひ給へる  
御そのに／ほひなとはなへてのかうにしみたるにも／あらず  
た、よのつねならずなつかしうかき／りなき御けはひみてもあ  
かぬかたみにと／りあへすこほる、涙にくれつ、なに事も／き  
こえあへす思ひ入たるさまいみしきに女【31オ】もうつし心う  
せはて、それもむかしのちき／りといひなからいとかうあるま  
しき心つかひ／をしつるも我心のあやまりにもあらず琴／のこ  
糸によりてかならず身をほろほすゆへ／とも成ぬへしと仙人の  
おしへしを思へは／いまこの時なりこれをかきりとおもふとも  
人／の心のならひさてしもえやむましきわさな／れはつゝにみ  
たれ○こんとすまことに我を／しのふ心ふかくあらぬ國にても  
忘れ給ふま／しくはこよひあたの命をうしなひてかな【31ウ】  
らす後の世のちきりをむすはんとの給て／したものこしよりす  
いしやうの玉の手に／いるほとなるをとりいて、つゝにわかち  
きりを／わすれすの給ま、の心ならばこのたまを身／はなたす  
もちていみしき雨風のさはきな／みのした成ともつゝにおとし

うしなはてわ／か國にかへり給へきけは日本にはつせ寺とい  
ひて、観音おはすなりかの寺にこの玉をも／てまいりて三七日そ  
のほうを、こなひ給へ／さてのみなむこの世の人のそしりを、  
はて【32オ】かならずふた、ひあひみるへきとの給てま／たふ  
けぬほとにかくるへいり給ひぬる名こ／りいへはさらなり袖  
を、しあて、なく／／このたまをにきりもちてわけ出る心ち  
は／たしやう山をいてし晝に過たり／□さめぬよの夢のた、ち  
をうつ、にていつをか／きりの別なるらん

一七 公主昇天

みこは宮にかへり給ひて覚／しつ、くるにさま／／うかりける  
ちきりは／さらにもいはすわか心もかうなからこの世にな／か  
らへはかならずうき名をと、むへき身な【32ウ】りけりと覚す  
によるつに思ひとちめつれ／はくらき夜の空を獨なかめて心の  
ゆくか／きり御手にまかせて引すまし給へるこ／との音みかき  
の松風にかよひあひていふよ／しなく物かなしきになつまし  
きりに／して雲のた、すまひた、ならねは／□いなつまのさや  
かにてらす雲のうへに我お／もふ事はそらにみゆらしうき身は  
こよ／ひにかきるともしやう山の月のもとにして／つたへしこ  
との音にちきりたえすは波の【33オ】外雲のよそに身をかへあ  
るひは天となりあ／るひは人となるともこの琴かならず忘れ／  
す尋ねことの給てたまのすたれをなかは／まきあけて琴を、し  
いて、しろきあふき／の御かたはらなるしてうちあふき給へる  
に／きむのこと空にのほりてはるかに飛さり／ぬるをつく／／

とうちなかめて涙のこほるるをあふきにまきはしてかたはらふし／給へる葦様とうろの火の光ほのかなるほか／けに、る物なくめてたきをやかて露のき【33ウ】え行やうにいふかひなくみえ給へは御前に／さふらふかきりさはきたちてなきとよむ／にみかともきこしめしつけていといふか／ひなく口おしき事をおほしなげく明行／ま、に今はかきりの御さまなれはいふか／ひなくてまつこ、のへをいたし奉らんとさ／はくみかきの外にて聞つけたるあけほの、／心ちそいふはおろかなる

一八 天下動乱

いける心ちもせぬに／みかとも程なくうちつ、きかくれ給ぬれは／國のうちおもへるさまいみじきはざる物にて【34オ】この御かとの御子いまたいはけなくおはす／る太子に立給へると御おと、の燕王えんおうと聞／ゆると國をあらそひてつは物のみたれた／ちまちに出きぬしたしうつかうまつりし／かきりは太子の御方にてまとひあへりかつ／ならひたる人もいくさのたけくいさめるにお／それであなたに心をつけあるひは引てう／つりゆくあるはつは物をあつめて后太子を／かたふけ奉らんとす家をならへかとをならへ／てた、かひの外の事なしあるははかりこと【34ウ】あらはれてめしとりて命をほろほさ／れあるは將相しょうしやう國の政まつりごとをしりつは物はつかさ／とるへき人／くをはかりころしてにけて／あなたにしたかひさはかしき事いはん方／なしこの人はこと國の人なれとみなこなた／にましはりて心より外の外にいくさのうちに／いて入とかの玉を身をはなたぬ事より外／にな

くていかてこの國をさりなんと思へとも／たかひにまもりいましめつ、いさ、かのひま／なししゐてにけ出ても又かなふへきならね【35オ】は思ひやるかたもなし御かともみこも後の御／わざといふ事なくた、いくさにまつはれ／てはかりことをさためつは物をえらはる、ほ／かの事なしともおとなひよろつの事を／みつからおこなひ給かたはさこそいへいくさ／のたけもこよなくはかり事もかしこけれ／は日にそへてつよりゆくにつゐにかたき／のつは物もの潼関とうかんといふ関せきをこえぬいくさのた／けくやさきのけやけくいさめることおもて／をむかふへきにあらすとしてふせくつは物あ【35ウ】めのあしのことにつかへるをとなひいふ／よしなくおそろしきにみかと母后おんごうも／ひとつに文武のつかさをしたかへてさる／へき國のたからともはもたせ給へれと我さ／きにとまとひ出る道せんかたなきに心よ／り外にともなひそめてのかれいてん方も／なればはよるともいはすはせはしるよ／りほかの事なしおふつは物はいかめしく／いかれるかきりをえらひと、のへたりこな／たはいはけなき君に后をそへ奉りてもて【36オ】あつかへはおなしさかしき山ふかき水を／も所せくゆきなやみつ、同じ道もやすからぬ／におふいくさすてにちかつきぬるよしを申／わつかにしたかひたてまつるつは物は心よ／はく道のかたはらにのかれと、まり山はや／しにかくれつ、都を出し時のなかはにた／におよはず日の暮かたにあれたる寺の／うちにゆきか、りてのかれんはかり事／なくまとひあへり【了】

付記

本稿は、二〇二一年度と二〇二二年度の「日本文学特殊研究―学習院本『松浦宮物語』を読む―」（於…学習院大学、講師・千野裕子先生）の授業中に翻字作業を行い、それらをまとめたものである。貴重な資料の調査をご許可くださった学習院大学文学部日本語日本文学科に御礼申し上げます。

（ますだ・たかし 博士後期課程）

（げん・しかん 博士前期課程）

（こいけ・ゆき 博士前期課程修了）

（たじま・ふみひろ 博士前期課程）

（のざわ・しほ 博士前期課程）

（やまだ・まお 博士前期課程）

（かわかみ・よしかぜ 本学部卒業・早稲田大学大学院文学研究科修士課程）

学研究科修士課程）